地域医療センター 地域医療連携通信

にじ

Kochi Health Sciences Center

認定看護師・専門看護師 実践発表会

・・・・・ P2~3

2

FEBRUARY 2020 Vol.172

第27回　日本消化器関連学会週間　若手奨励賞受賞
消化器外科・一般外科　松本 尊嗣 ・・・・・・・・・・・ P4
第80回　日本臨床外科学会総会　研修医Award受賞
初期臨床研修医　吉本 皓一 ・・・・・・・・・・・・・・ P5
第64回　学会出張報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ P6
第65回　学会出張報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ P7
高知医療センター　イベント情報 ・・・・・・・・・・・ P8

昨年12月21日(土)に開催した救命救急センター Xmasイベント ドクターヘリ見学会にて　救命救急センター 西田センター長(左)、平野医師(右)とくろしおくん

高知医療センターの理念　　ー 医療の主人公は患者さん ー

高知医療センターホームページ http://www.khsc.or.jp/

第6回

認定看護師・専門看護師 実践発表会

その人らしい生き方を支える

令和元年12月7日(土)高知医療センターくろしおホールにて第6回認定看護師・専門看護師実践発表会を開催いたしました。今回、「その人らしい生き方を支える」をテーマに、基調講演は高知県立大学　健康長寿センター　特任准教授　森下幸子先生にご講演をいただきました。認定看護師・専門看護師の実践発表は、認定看護師より7題、専門看護師より2題の発表がありました。この実践発表会は、多くの医療従事者に認定看護師・専門看護師の役割や活動について理解してもらい、活用や協働することで看護の質の向上につなげていきたいと考え開催しています。また、共に学び交流を深めながら、それぞれの活動を支える力になればと思っています。今回、院外からの発表は4題、実践発表会への参加者は123名で、様々な分野の認定看護師・専門看護師が専門性の高い看護のケアについて考える機会になったのではないかと思っています。

交流会は昨年度から始めた実践発表会の様子を撮影した動画を上映し、参加者とともに実践発表会を振り返る時間を共有でき、より一層親睦を深めることができました。

実践発表会の開催にあたり、多くの皆さまにご協力いただきましたことを感謝いたします。様々な分野の活動を知ることができる実践発表会を今後も継続する予定ですのでどうぞよろしくお願いします。

認定看護師・専門看護師実践発表会委員長　山本 晃子(新生児集中ケア認定看護師)

基調講演

その人らしい生き方を支える
～ケアをつなぎ希望を支える看護を目指して～

【講師】高知県立大学　健康長寿センター
特任准教授　森下 幸子先生

今回、高知県立大学健康長寿センター特任准教授　森下幸子先生をお招きして、「その人らしい生き方を支える～ケアをつなぎ希望を支える看護を目指して～」というテーマでご講演いただきました。森下先生は、2015年から高知県立大学に設立された寄付講座で、在宅医療の要となる新任・新卒訪問看護師の育成と、医療と介護の連携をコーディネートできる在宅志向性のある看護師の育成に取り組まれています。高知県の医療や看護、資源の現状や連携について学ぶことで、自分たちの今後の活動に活かしていきたいと考え、拝聴させていただきました。

高知県の高齢化率は、全国平均を10年先行して上昇していると言われています。今後中央医療圏域以外は高齢者数・医療需要共に横ばいか減少し、医療需要のピークは2025年～2030年といわれています。先生は、自分が望む場所で自らの医療やケアを選択・決定できる医療・介護の体制作りが喫緊の課題となっている事に対して、行政や地域の訪問看護ステーションと協力し、患者さんや家族の思い描くエンドオブライフを、最後までその人らしく生きることができるように支援されています。

私たちは、地域で一人一人の住民が形作ってきたエンドオブライフを誰が実行していくのかを考えなければなりません。高齢化や独居が進みその担い手も不足しているという現状がある中で、急性期病院と行政・訪問看護ステーションが連携を深め、地域の実情を踏まえた支援体制の構築や取り組みを行っていく必要があると感じました。また、患者・家族を中心とし、その人らしさを大切にしたケアが切れ目なく提供できるように、専門性を活かし、つながり合う事を大切にケア実践に取り組んでいきたいと思います。

小児看護専門看護師　　永井 友里

実践発表

当院における認知症ケア実践報告

精神科認定看護師　岡村 邦弘

近年、高齢化が進み2025年には高齢者の５人に１人は認知症、軽度認知障害をあわせると５人に２人は何らかの認知機能障害を有していることになります。

当院は認知症ケア加算１を算定しており、認知症ケアチームの活動は週１回の認知症ケアチームラウンド、ラウンド時のスタッフとの情報交換、定期的な認知症ケア研修などを行っています。

せん妄・認知症ケアリンクナース会では、せん妄予防パンフレットの作成、認知症患者さんの看護計画立案や評価、認知症患者さんへの介入技術など研修や事例検討を行っています。

私は精神科認定看護師として、患者さんの認知機能の状況を判断し、スタッフと協働して直接的な認知症ケアを実践するため日々ラウンドを行っております。

また、今後、患者さんの認知機能低下予防や身体機能の改善を目指した『院内デイケア』の開設を予定しています。患者さんが急な環境の変化により自身の身に何が起っているのかわからない状態を少しでも軽減し、安心して治療を受けることができるよう働きかけていきたいと考えます。

交流会

楽しく実りある
交流会になりました♪

news!

第27回 日本消化器関連学会週間 若手奨励賞受賞

消化器外科・一般外科　松本 尊嗣

11月21日から24日に兵庫県神戸市で開催された第27回日本消化器関連学会週間（ＪＤＤＷ　２０１９　ＫＯＢＥ）にて若手奨励賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。

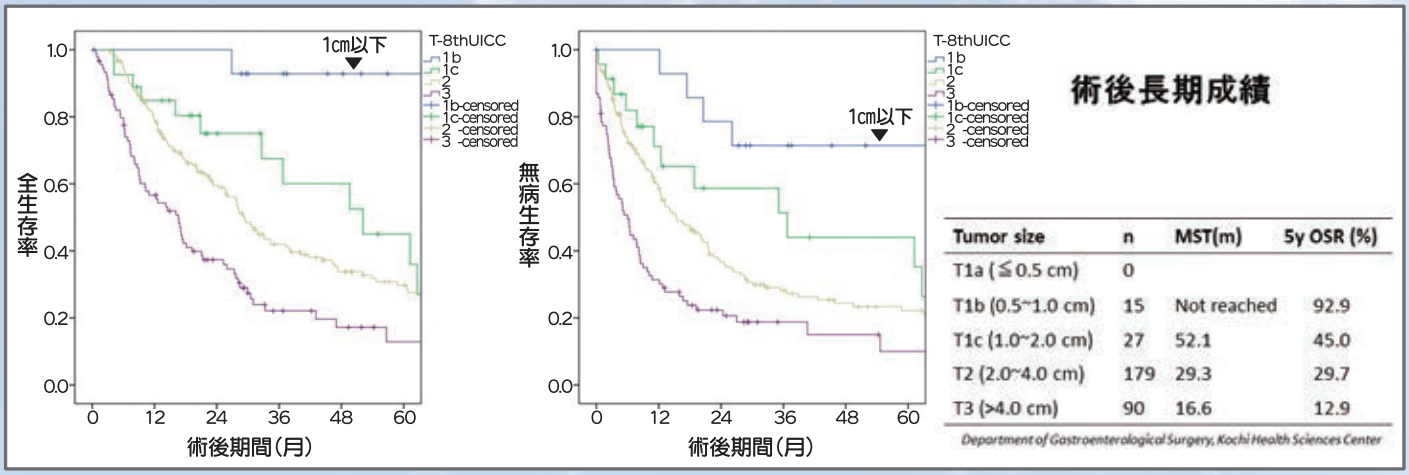
今回発表した演題は「1cm以下小膵癌の診断契機と臨床病理学的特徴」でした。膵癌は予後不良な悪性腫瘍で、５年生存率は最新の国立がん研究センターの2016年癌統計によれば男女とも8%に届いておりません。膵癌において唯一根治を期待できる治療は外科切除で、現在の医療においても膵癌治療の大きな柱であります。しかしながら切除例は全体の2-3割程度にすぎず、その理由として、高い生物学的悪性度と共に、早期発見が困難であることがあげられます。しかし、最近では超音波内視鏡検査など、画像診断能の向上から、小さな膵癌の発見数は増加傾向にあります。

今回の研究では、１ｃｍ以下小膵癌１５例の診断契機と、その臨床病理学的特徴を当科のデータベースを元に後方視的に検討しました。無症状例は８例（53.3%）で、これらの発見契機としては、他疾患経過観察中のCT、検診腹部超音波検査が合わせて５例、肝酵素、血清アミラーゼ値、腫瘍マーカーの上昇を合わせた血液検査での異常が３例と、検診を含めた定期的な医療機関の受診者例でした。

１ｃｍより大きな膵癌症例との比較では、小膵癌は有意に手術時間が短く、術後在院日数が短いという結果でした。病理学的因子の検討では小膵癌で有意に膵外進展率、リンパ節転移陽性率、脈管侵襲陽性率、神経周囲浸潤率が低いという結果でした。しかしながら、小膵癌であっても約３割の症例でリンパ節転移陽性であることが明らかになりました。

術後長期成績をみますと、小膵癌患者の切除後生存率は１ｃｍを超える膵癌と比較すると有意に良好で、これらの結果から膵癌の早期診断は患者さんの予後改善に非常に重要であることが確認されました。その為には、2019年度版の膵癌診療ガイドラインに示されている様なリスクファクター（家族歴、糖尿病、肥満、慢性膵炎など）の認識、啓蒙と高リスク症例の適切なスクリーニング、サーベイランスが今後ますます重要になってくるのではないかと考えています。

今回の発表内容、プレゼンテーションの構成に関して、当院消化器外科・一般外科　岡林雄大先生にきめ細やかなご指導をいただきました事を深謝申し上げます。同時に、臨床において数多くの膵切除症例を積み重ねられ、良好な術後成績を残され、データベースを整理、update されている外科の諸先輩方に深く御礼申し上げます。



病院長より一言

高知医療センターでは代表的な難治がんである膵癌に対し外科手術を中心に多くの臨床経験を積み重ねています。今回の発表対象となった1cm以下の小膵癌は1cm以上の膵癌と比較して５年生存割合が極めて良好で92.9%という素晴らしい成績が示されています。しかしながら今回解析対象となった膵癌３１１例中のわずか１５例であり、4.8%に過ぎません。改めて膵癌が難治がんであることを実感するデータであります。３１１例という大きなデータベースの元になった患者さんをご紹介いただいた、医療機関の先生方のご協力に心より感謝申し上げます。厳しい現状を認識した若手医師である松本医師が、唯一治癒を実現できる外科手術に磨きを掛け、一人でも多くの患者さんを助けることを期待したいと思います。

news!

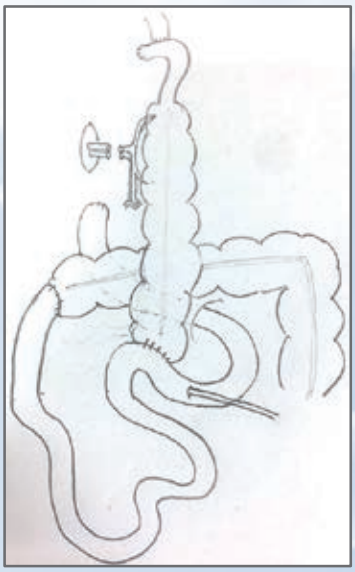
第80回 日本臨床外科学会総会 研修医Award受賞

初期臨床研修医　吉本 皓一

2018年11月22日～24日に東京都で開催された第80回日本臨床外科学会総会の研修医セッション：06.食道にて、研修医awardを受賞しましたのでご報告させていただきます。

今回発表した演題は『食道癌術後の胃管癌に対し胃管全摘を施行した2例』でした。胃管癌とは、食道癌術後に再建された胃管に発生する癌です。近年食道癌治療成績向上に伴って胃管癌の発生が増加しており、胃管癌の切除は技術的に困難で高侵襲です。今回、進行胃管癌に対して術式を工夫し、安全に胃管全摘を施行しえた2例について報告しました。

医療センターにおける胃管癌の発生率を調べました。2005-2018年において、食道悪性腫瘍手術321症例中、胃管癌は10例でした。うち8例は内視鏡的切除が可能でしたが、2例は外科切除の対象となりました。発見契機としてはサーベイランスが9例、有症状が1例でした。発生までの期間の中央値は94か月(34-234)でした。

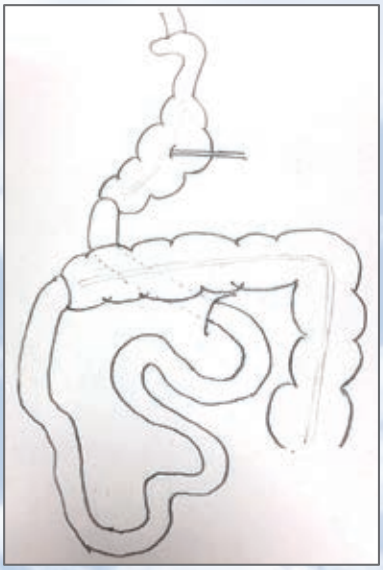


【症例1】
有茎回結腸、スーパーチャージスーパードレナージ

症例1は食道癌術後20年後に上部消化管内視鏡検査で病変が発見されました。PNI 37.5と低栄養状態であったため、2期分割手術により術後のリスクを低減しました。

1期目は胃管全摘術、食道瘻造設術を行いました。POD1より経腸栄養を開始し、3ケ月後(PNI 40.0)に2期目にあたる再建術を行いました。また血管吻合付加により縫合不全のリスク低減に努めました。術後24日後に退院しました。

症例2は食道癌術後13年後に上部消化管内視鏡検査で病変が発見されました。初回手術を胸腔鏡下食道切除術を施行していたため、癒着が少なく胃管切除を鏡視下操作で完遂できました。術後36日目に退院しました。



【症例2】
有茎回結腸

今回初めてのスライド発表であり、スライドの構成・発表内容に関して当院消化器外科　澁谷先生をはじめとする諸先生方にご指導いただき、今回の賞を受賞することができました。また同年代の研修医の発表を聞くことができ、自分にとって大事な刺激となりました。今回の経験を今後の診療に役立てていき、より一層自己研鑽に励みたいと思います。

病院長より一言

2018年11月開催の日本臨床外科学会総会での研修医Awardを初期臨床研修医の吉本医師が受賞されました。県内では外科医師を希望する若手医師が少なく、危機感が募る状況です。今回先輩外科医が手術をされた食道癌の20年後、13年後に発生した胃管癌の2例の症例報告であり、正に大先輩の遺産を受けての発表と言えます。食道癌手術は消化器癌手術の中でも難度が高く、治癒の指標である5年生存割合も決して高くありません。患者さんにとっても20年、13年の経過でまさか2回目の癌を経験し、手術を受けるとは思ってもみないことです。この間に患者さんも年齢を重ね、初回手術よりもリスクが上昇している上で、進歩した栄養管理や、腹腔鏡手術を適応して見事に2回目の癌を克服されてます。

食道癌手術321例中、胃管癌発生10例、内視鏡的切除8例、手術2例ですが、長期にわたるサーベイランスでの発見が9例です。多くは紹介元の医療機関に検査をお願いして発見されており、改めて地域連携の重要さを実感する長期経過例です。

第64回：医療センター職員による学会出張報告

International Society of Ultrasound in Obstetrics and Gynecology（ISUOG）

in Berlin 2019.10.12~16

産科　永井 立平

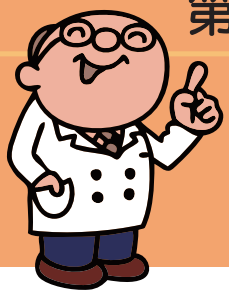
もうかれこれ８年も前になりますが、浜松の産科の先生に誘われて行ったのが初めてのISUOGでした。当時の私は高知大学から高知医療センターに異動してまだ間もなくであり、症例の多さと診たことのない胎児疾患への対応に精一杯でした。30代半ば、産科婦人科医としては中堅でしたがその頃はまだ高知県には産科専門医がおらず、胎児診断・胎児治療については県外施設の先生方の力を借りながら高知でできることを何とか行っていました。International Society of Ultrasound in Obstetrics and Gynecology、和訳では世界産婦人科超音波学会になるでしょうか。胎児の観察は母体のお腹の中の、さらに子宮の中の情報が分からなくてはなりません。様々な医療診断装置の中でも母体や胎児に害なく使用することができる超音波診断装置は胎児診断・治療の世界では欠かせない重要なツールであり、胎児診断・治療の最先端は超音波検査で成り立っています。つまり、この学会は世界の産科医療のエキスパートたちがこぞって参加する、いわば「産科のオリンピック」と言っても過言ではありません。その学会に高知代表、いや日本代表（言い過ぎ）として参加するのです。「世界を見てごらんよ」浜松の先生にそう言われ、ドキドキしながら慣れない英語で抄録を作成したことを今でも鮮明に覚えています。

今回のISUOGは10月12日から５日間、ドイツのBerlinで開催されました。ヨーロッパに行く場合トランジットでMunichやFrankfurtを経由することはありましたが、実際にドイツの地を踏みしめるのは初めてでした。ドイツへの旅は最初から嵐の予感で、台風の影響で日本を脱出できるか、いや高知を脱出できるかどうかも分からない状況でした。幸い全便欠航になる数時間前に日本を飛び立つことができましたが、乗り継ぎ便に大きな変更が生じ人生初のロストバゲージ。着いて最初にしたことがユニクロドイツでYシャツとパンツを買い、無印ドイツで歯ブラシを買うという、なんとも波乱のスタートでした。

今回の私の発表演題は主に国内留学先で行った研究で、「羊水注入に伴う母児への有害事象」についての検討でした。何らかの理由（破水、胎児の病気、胎盤の病気など）で胎児を包んでいる羊水が無くなってしまうと、胎児の環境は大きく変化することになり発育や発達に大きな影響を及ぼします。失われた羊水を人工的に補充することを人工羊水注入と言いますが、母体外から針を刺して子宮内まで人工羊水（生理的食塩水）を送り込まなくてはなりません。侵襲的な処置であり、出血や感染、針による傷ができるなど母体と胎児への有害事象も起こる可能性があります。母児に良い治療でも安全が担保できなければ意味がありません。これまで有害事象を客観的に評価した研究はなく、今回の私たちの発表は日本発、世界初の研究成果発表でした。口演はもちろん英語で、しかもcloseな会場のなかヘッドフォンでとても良く聞き取れてしまうそれはそれは恐ろしい環境（きっと英語で発表された方は分かるはず・・・）でしたが、伝えたいことは何とか発信できたのではないかと思います。

発表が終わり緊張が解けると、不思議とBerlinの景色が美しく見えました。高知より大分寒いことを心配していましたが、Berlinの町並みは秋色に染まっており、暑くもなく寒くもなく大変過ごし易い気候でした。いままで訪問したヨーロッパの国々よりもきっちりとした印象（今までがイタリアやスペインだったからか？）で、接する人々は片言英語のアジア人にとても親切でした。Berlinの特産物と言われてもあまりピンと来ませんでしたし、食事もあまり期待していなかったのですが、口にした食事はすべて美味しかったです。何よりビールが素晴らしく美味しかった！観光も（少しだけ）行いましたが、Berlinの壁、Brandenburg門など大国の歴史に触れることができました。いまや恒例となった日本全国のランバカ周産期医達とBerlinのマラニック（マラソン＋ピクニックの造語：しかも現地ランナーの英語解説付きツアー）も企画。英語の勉強と他施設Drとのコミュニケーションと趣味の融合、これもまた海外学会の大きな楽しみの一つです。

その学会も今回で５回目。世界の周産期医療の最先端に触れることができること、日本や自分の日常診療の方向性について確認できること、他の学会参加者との熱い交流が学会参加への動機付けとなっており、逆に学会に参加することが日常診療へのモチベーションアップに繋がっていると感じています。日本の片隅の地方中核病院ですがアカデミックな心も忘れずに、このマインドをこれからは後輩達にも伝えていかなくていけないと思います。いつも学会期間中留守を守ってくれる同僚達や、快く（諦めて？）送り出してくれる家族に感謝するとともに、次回以降も参加できるよう、高知から世界に発信できる何かを探しながら日々の診療に精進したいと思います。



第65回：医療センター職員による学会出張報告

5th Again Conference for Frailty and Sarcopenia（ACFS）in 台北

2019.10.22~24

医療技術局　加嶋 憲作

5th ACFSが、2019年10月22日から24日の日程で、台北のCHANG YUNG-FA FOUNDATION International Convention Centerで開催されました。ACFSはアジア地域のサルコペニア・フレイルに関する様々な分野の課題をテーマに研究と交流を行なっている学会です。私は、糖尿病性多発神経障害と身体機能低下・サルコペニア有病率の関連性についてポスター発表をさせていただきました。

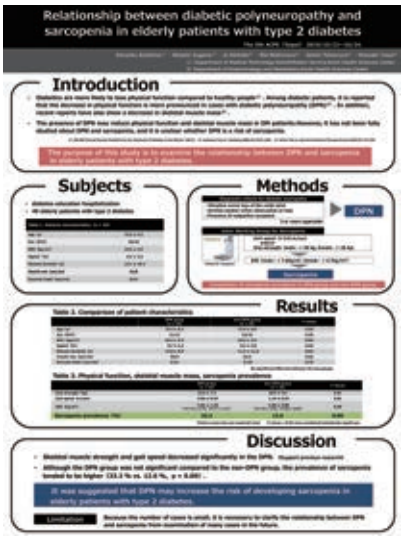
CHANG YUNG-FA FOUNDATION
International Convention Center

私にとって国際学会は未知の領域でした。しかも単身参加だったので、発表どころか会場にすらたどり着けないかと心配していましたが、開催地が台湾だったことが救いでした。台湾は私が抱いていたイメージ通り、親日的で、治安は良く、街には日本のチェーン店が至る所にあったためか、妙な安心感を持ちました。地下鉄など交通機関の乗り方も日本と似ており、滞在中は海外初心者の私でも快適に過ごすことができました。

台北駅

士林市場

肝心の学会については、英語力ゼロの私にとって手厳しいものでした。同じアジア圏でも、日本と比べて台湾や中国、韓国からの参加者は、英語が達者な人が多かったように感じました。また、全体的にラフな服装の人が多く、日本の学会では見慣れぬ光景に驚きました。ろくに英語も話せないくせに、身なりだけは一丁前にスーツでいる自分がとても恥ずかしくなり、人知れずそっとジャケットを脱ぎました。基調講演やシンポジウムでは、流暢な英語のスピーチを聞き取れるはずもなく、提示された講演スライドを読むのが精一杯でした。時折混じるジョークにも反応できずにキョトン顔。次第に口数は減り、困った時は愛想笑いでその場をやり過ごしました。



トピックスとしては、アジアサルコペニアワーキンググループが提唱する、サルコペニアの診断基準が改定されることが発表されました。改定内容の詳細については本学会では示されませんでしたが、翌月に新潟で開催された第6回日本サルコペニア・フレイル学会において、「サルコペニア診断基準2019」が正式に公表されました。アジア人のエビデンスをもとに、握力や歩行速度を指標として測定する今回の改定内容では、骨格筋量の測定装置がないかかりつけ医や地域の医療現場での診断を可能にするための簡便なアルゴリズムが作成され、臨床現場で測定しやすい方法を選択できるようになりました。つい先日には、厚生労働省が来年度から75歳以上を対象に新たな検診制度「フレイル検診」を導入することを発表しました。今後、サルコペニア・フレイルへの関心はますます高まるものと思われます。

今回、身の丈に合わない学会参加ではありましたが、国際学会の雰囲気は味わうことができました。とても貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

高知医療センター　イベント情報

参加費無料・申込不要

2/3（月）高知医療センター がんゲノム医療講演会

内容：がんゲノム医療～何ができるのか、何ができないのか～
講師：国立がん研究センター中央病院　副院長
　　先端医療科・科長　山本 昇 氏
場所：高知医療センター　2階　くろしおホール
時間：18：00 ～ 19：00 ／対象：医療関係者

お問合せ：事務局　経営企画課　棚野　TEL.088-837-3000（代）

参加費無料・申込不要

2/8（土）高知医療再生機構 小児科専門医 養成支援事業

内容：小児の炎症性腸疾患の診療
講師：大阪医科大学　小児科　准教授　余田 篤 氏
場所：高知医療センター　がんサポートセンター 4階　研修室
時間：15：00 ～ 16：15 ／対象：医療関係者

お問合せ：小児科　西内　TEL.088-837-3000（代）

参加費無料・申込要

2/8（土）令和元年度 全国自治体病院協議会 高知県支部研修会

内容：令和２年度　診療報酬改定について
講師：一般社団法人　日本血液製剤機構　谷澤 正明 氏
場所：高知会館　2階　白鳳（高知市本町5-6-42）
時間：14：00 ～ 16：00 ／対象：医療関係者

お問合せ：全国自治体病院協議会　高知県支部事務局
　　高知医療センター　事務局内　担当　中村 真帆
　　TEL.088-837-3000（代）　FAX.088-837-6766

参加費無料・申込不要

2/9（日）高知医療センター・高知県立大学　包括的連携事業 第57回　高知医療センター 地域医療連携研修会

高知家健康パスポート ヘルシーポイント進呈

内容：人生の最終段階における医療について
講師：高知県健康政策部 医監（兼）医療政策課長 川内 敦文 氏ほか
場所：オーテピア　4階　研修室（高知市追手筋2-1-1）
時間：13：30 ～ 15：30 ／対象：医療関係者・一般

お問合せ：地域医療センター　小島
　　TEL.088-837-3000（代）　FAX.088-837-6701

参加費無料・申込要

2/20（木）高知医療センター 看護局集合研修 他施設公開研修

申込期限 2月10日（月）

内容：成人BLS ／ AED研修
講師：BLSインストラクター
場所：高知医療センター　2階　スキルズラボ室
時間：9：00 ～ 12：00 ／対象：看護師（3名）

申込用紙は当院ホームページ 看護師他施設公開研修よりダウンロードできます。必要事項をご記入の上FAXにてお申し込みください。申込代表者は看護部門の担当者様でお願いいたします。
お問合せ：看護局　教育担当　有澤・佐野・川田
　　TEL.088(837)3000(代)　FAX.088(837)6766

参加費無料・申込不要

2/28（金）婦人科手術セミナー

内容：卵巣癌治療～新規治療薬の役割～
講師：東京女子医科大学 産婦人科学講座 教授・講座主任 田畑 務 氏
場所：高知医療センター　がんサポートセンター　4階　研修室
時間：19：15 ～ 20：30 ／対象：医療関係者

お問合せ：婦人科　山本 寄人　TEL.088-837-3000（代）

参加費無料・申込不要

2/28（金）第18回 高知DPCセミナー

内容：DPCと地域医療構想
講師：産業医科大学　公衆衛生学　教授　松田 晋哉 氏
場所：高知医療センター　2階　くろしおホール
時間：18：30 ～ 20：00 ／対象：医療関係者（事務含む）

お問合せ：医療情報センター　大﨑 衣玲　TEL.088-837-3000（代）

参加費無料・申込不要

3/6（金）高知医療センター 医療倫理講習会

日本専門医機構認定 専門医共通講習 （医療倫理）1単位

内容：臨床倫理の基礎～課題の背景と、課題対応のために、
　　医療従事者・管理者がなすべきこと～
講師：慶應義塾大学大学院　大学院健康マネジメント研究科
　医療マネジメント学分野　公衆衛生学分野　教授　前田 正一 氏
場所：高知医療センター　2階　くろしおホール
時間：18：30 ～ 19：30 ／対象：医療関係者

お問合せ：事務局　経営企画課　井上　TEL.088-837-3000（代）

※時間等、変更になる場合もございますのでご了承ください。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

編集後記

２月となり、１年で最も寒い月となりました。

昨年、高知県は９月下旬にインフルエンザの流行期に入り、過去２番目の早さでした。その後一時的に患者数は減少しましたが、12月から再び流行期に入ったそうです。昨年の流行が早まった原因の１つとして、ラグビーワールドカップ開催にあたり、世界中から約40万人の外国人が来日したため、海外からのインフルエンザウイルスが流入したことが原因の１つでは、とされているそうです。

今後もこまめなうがい・手洗いを心がけ、症状があるようなら咳エチケットにも心がけ、早めに医療機関を受診しましょう。（広報委員　濱本）

広報誌「にじ」に関するご要望・ご意見をお寄せください。 renkei@khsc.or.jp

令和２年２月１日発行
にじ２月号（第172号）
毎月発行
編集者：広報委員会
発行者：島田 安博
印　刷：株式会社 高陽堂印刷

発行元：
高知県・高知市病院企業団立
高知医療センター
〒781-8555 高知県高知市池 2125-1
TEL:088（837）3000（代）